

【論文】

表現としてのノエマ

齋藤 暢人

0. はじめに

ノエマはフッサール現象学の最重要概念のひとつであるが、にもかかわらず極めて難解な概念でもあり、当のノエマとは何なのかについて、定説といえる解釈は未だに存在しないと言ってよい。ノエマの主要な解釈には、少なくとも心理学的なものと同意味論的なものとの二つがあり、これらが対立しているのが現状である。

しかしながら、ここで想起すべきは、フッサール現象学における根本的な問題が時間論であったことではないか。上記の二説は知覚論の文脈でノエマ概念を理解しようとする試みであり、いずれもこの問題とは直接関わらない。この制約を破り、フッサールの根本問題である時間論との関係に焦点を当てるならば、新たなノエマ解釈の可能性が開かれてくる。ノエマは知覚の分析から生み出された概念であり、それゆえ問題となるのは知覚される存在であって、ノエマ論はたしかに存在論である。しかし存在論にとって時間論はその前提であり、両者の結びつきに注目することによって、時間を意識する形而上学の立場を視野に入れることができるようになる。実は、フッサールの同時代の形而上学者にはこのような傾向が広く見られ、それゆえ時間論でもあるノエマ論は、現象学の形而上学的含意を明らかにすることに貢献しようように思われる。本稿ではこのような、これまで注意されてこなかった角度からノエマ概念にアプローチを試みる。

議論は以下のように進む。はじめに、ノエマ概念の主要な解釈について概

観する (1)。次に、フッサール現象学の基礎である志向性について再考することで、ノエマ概念の新しい解釈の可能性を探る (2)。次いで、ジェイムズの見かけの現在について、また、それとフッサール現象学との関係について述べる (3)。続いてジェイムズの影響下にあるとみなせるホワイトヘッドとサンタヤーナの形而上学を紹介し (4)、そのうえでそれらとの接点に基づき、フッサール現象学におけるノエマ概念の再解釈の可能性を検討する (5)。最後にノエマ概念の新しい特徴づけについて検討する (6)。

1. ノエマとはなにか

フッサール現象学における中心的概念のひとつであるノエマについてはこれまで多くの研究が蓄積されてきたが、なかでも注目すべきものとして二つの主要な解釈が形成された。二つの解釈とはゲシュタルト心理学に由来するもの、およびフレーゲの論理的意味論に由来するものであり、それぞれをノエマの心理学的解釈、意味論的解釈と呼ぶことができようⁱ。心理学的解釈はギュルヴィッチの研究に端を発するものであり、意味論的解釈はフェレスダールが研究の先鞭をつけ、多くの後継者を生んだものであるが、ここで両説についてごく簡単に紹介しておこう。

心理学的解釈：ノエマはゲシュタルトの一種であるⁱⁱ

ギュルヴィッチにとって、ノエマは、フッサールが「知覚されたものそのもの」と呼ぶものに他ならず、知覚におけるパースペクティブを含むものである。

それゆえ、ギュルヴィッチによれば、フッサール知覚論における最重要概念は地平である。知覚の対象には内的地平があり、可能性にとりまかれている。知覚されるのは多様な現出であり、統一体としての対象は現出の多様を通じて構成される。ノエマとしてのそれは、多様な現出を包括する契機である。したがって、ノエマは対象の現出の一部となり、それゆえ知覚の場合は知覚対象の部分となる。

意味論的解釈：ノエマはフレーゲの意義に類似した内包であるⁱⁱⁱ

これに対して、フェレスダールは、フッサールのノエマをフレーゲの意義 Sinn の一般化とみなす。フレーゲの意義はそもそも言語表現の内包として導入されたのだが、これを、知覚を含む心的作用全般の内容へと一般化したのがノエマである。

この見解の影響力は大きく、フッサール現象学の諸概念を内包的意味論の枠組みにおいて解釈し、言語と心理の包括的な意味論を構築しようとする動向を生み出した。

これらが解釈であるかぎりには、フッサール自身のオリジナルな思想にどれほど忠実であるかは重要な問題であるが、それぞれがどのような成果を生み出しうるかという理論的生産性もまた無視すべからざる指標である。一見したところ、可能世界意味論を含む内包論理の成果を利用しうる意味論的解釈の体系性は、その優位性の証であるようにも思われよう。しかしながら、全体と部分の関係に焦点を当てる心理学的解釈のほうにも、いわゆるメレオロジーの観点からさらなる発展の余地があるように思われる。不変項としてのゲシュタルトは部分の総和以上のものと解されうるが、その特性を論理的に純化するならば、位相の概念による分析に帰着するであろう。現状ではいわゆる位相幾何学的心理学と現象学の関連性を探究する研究は多くはないが、すでに先駆者によって着手されたこの分野をさらに開拓してゆくことは今後の重要な課題ではないか。

これらの解釈は微妙な論点を含んでおり、本質的な差異がどこにあるのかにはわかには決しがたいが、最大の相違は、フッサールがそもそもあいまいな記述しか残さなかった「知覚されたものそのもの」をめぐって現れる。ギュルヴィッチにとってのノエマはこの「知覚されたものそのもの」であり、それゆえ知覚対象であるが^{iv}、フェレスダールにとってのノエマは、それを介して対象への志向が可能となる知覚内容である。

かくして両解釈の対立は明らかであるが、一致点がないわけではない。と

りわけ重要なのは、フッサール自身の見解のひとつを固守する点である。つまり、フッサールはノエマをあくまでも意味だとしたのであったが、これを両説はともに受け容れる。これらは異なった解釈、理論ではあるものの、意味の理論でありつづけようとするのであり、ともに意味論を自認するのである。

この一致点は、ノエマの存在論にも関わってくる、という意味で重要である。ギュルヴィッチとフェレスダールのいずれにとっても、意味であるノエマは非時間的なものである⁹。一方のギュルヴィッチにとっては、ノエマは多様な現出における不変項であって、与件の多様から独立なものでなければならない。他方のフェレスダールにとっては、内包の一種であるノエマは抽象的存在者でしかない。意識という本質的に時間的なものに寄与しながら、ノエマそれ自体は意識とは異質な存在様式をもつのである。

だが、ここで次のような疑問も生じるであろう。意味という概念の多様性、深さを考慮すれば、さらに異なる立場からフッサールのノエマを解釈することもまた可能なのではないか。とくに、同時代の形而上学の動向にも目を向けるとき、フッサールの現象学はより大きな形而上学的潮流の一支流とみることも不可能ではないのである。そうであるとすれば、ここでノエマの形而上学的解釈もまたありうるのではないか。

この問いに答えるのは、しかしながらわれわれの最終的な目的であり、そこに至るためにはさまざまな論証の段階を経る必要がある。先を急がずに着実に議論を進めてゆくこととしよう。

2. 志向性の再検討

2. 1. 志向性の構造

ノエマとはなにかをめぐる議論は以上のように錯綜しており、その正体を明らかにするのは容易ではない。そこで、まずはこの概念が導入される文脈を改めてたどりなおしてみることとしよう。言うまでもなく、ノエマは志向性というフッサール現象学の中心概念の一契機である。では、志向性とはそ

もそもどのようなものだったのか。ここではそれを、とくに時間意識との関係において再確認してゆこう。

周知のように、フッサールは志向性という概念を師であるブレンターノから学び、『論理学研究』において自らの思想に取り入れたのであるが、その後著された『イデーニ I』においては、その概念は独自のものとなっていた。フッサール現象学において意識の基本構造として提示された志向性は次のような三つの契機、すなわちノエシス、ノエマ、ヒュレーからなる (Ideen I, § 85, § 88)。

表 1 志向性の構造

ノエマ	ノエシス	モルフェー 形相 (統握)
	ヒュレー	質料
志向的	実的	

これら諸契機のはたらきを簡単に述べておこう。志向的体験としての意識において、ヒュレーをモルフェーとしてのノエシスが活かす (生化する)、あるいはそれに意味を付与する (解釈する) ことによって (Ideen I, § 85)、志向的相関項としてのノエマが構成される (Ideen I, § 88)。この志向的相関項であるノエマの導入が、ブレンターノの思想およびその影響下にあった『論理学研究』の時期の思想にはみられなかった独自性である^{vi}。つまり、志向的であることは、「実際に意識の部分となっている」という実的であることから明確に分離されたのである。そして、そのような志向性のターゲットとしてのノエマが勝義の対象であるのに対して、実的なものとどまるヒュレーは反省以前の無規定なものであり、意識の対象とはなりえない (Ideen I, § 86)。また、ノエマは意識のもうひとつの実的構成要素であるノエシスと相関関係にある (Ideen I, § 88)。

このようにノエマ、ノエシス、ヒュレーは志向性を成立させるためにそれ

それぞれ異なる役割を引き受けており、どれも不可欠の契機であるが、これらのあいだのどこに線を引くのかは重要な問題である。その引きかたによって意識のとらえかたが変わるからである。ごく単純に考えれば以下の三通りの分類が可能である。

表2 ノエシス、ノエマ、ヒュレーの可能的分類

①	ノエマ、ノエシス	ヒュレー
②	ノエシス、ヒュレー	ノエマ
③	ノエマ、ヒュレー	ノエシス

①は、志向的相関関係にあるものとヒュレーとの対比である。これは解釈する作用とその材料の関係であるが、モルフェーとヒュレーという名称が示唆するように、形相と質料の対比でもある。

②は、先に説明した志向的と実的の対比である。つまり、意識の構成要素であるか否かによる区分である。

③の対比は単なる論理的な可能性、形式的可能性にも見えるが、次のように考えれば実質的可能性である。すなわち、ノエマとヒュレーは対象になりうるものとなりえないものとして対立関係にあるが、しかしいずれもノエシスが関与するものであるという点においては一致している。ここに、これら二つの契機とノエシスのあいだの対比が認められる。ノエシスのはたらきは解釈作用として自発的であり、それに対してノエマとヒュレーはいずれも受容的なものとなる。

尤も、フッサールはカントとは異なり、受容的なものなかにも自発的な構成作用を認める（受動的綜合）。それゆえ、ここでの自発性と受容性の対比から、ただちに超越論的統覚の存在を要請するべきではない。

また、Zahavi は、フッサールが提示した内的時間意識は結局のところノエマとしての時間の構造であって、それに対して、時間意識がそれ自体を構成する（＝構成される）という側面を強調し、ノエシス的時間意識の必要性

を主張している^{vii}。これに類するノエシスの強調はこの③の対比に該当するであろう。

2. 3. 志向性と時間

以上から、フッサールによるノエマの導入の意義は、②の志向的であることと実的事であることの差異の導入であると言える。しかし、志向性のなかに①、③のような他の差異を読み取ることが不可能ではないことも明らかとなった。

ここで、ノエマの解釈における論点のひとつを想起しよう。ノエマとはなにかをめぐる二つの説のいずれにおいても、ノエマは意味であり、したがって非時間的なものなのであった。また、与件としてのヒュレーを解釈するノエシスは、与件という質料に対する形相であって、それゆえ（意識を構成する実的な要素であるにもかかわらず）非時間的なものでありうるのである。ノエマとノエシスの相関関係もまた、ノエシスを時間性から引き離す根拠となる。

これに対して、ヒュレーは定義上無規定なものであるとされているが、意識の素材であり、ここで意識の時間性をどこかに帰する必要があるとすれば、その置き所はもはやこれしか残されていないであろう。それゆえ、その定義にもかかわらず、われわれはヒュレーが時間性を帯びているとみるべきではなからうか。フッサールはノエシス・ノエマ相関を論じるに先立ち、意識の普遍的な構造として内的時間意識の形式（いま、もうない、まだない）を認めている（Ideen I, §82）。ヒュレーは（意識内容であるから）それと同一視できるものではないが、この形式はその個体化の原理としての性格を抽象したものなのではないか。この内的時間意識の形式は（時間性をもたない意識、流れない意識はありえないという意味で）最も基本的な志向性である（Ideen I, §81）^{viii}。それゆえこの志向性はいわゆる知覚に先行する以上、その内容と緊密に一体化して不可分なものとなっており、そのかぎりにおいてヒュレーは予め時間的なものではなからうか。

この対比は表中の①にあたる。このノエシス・ノエマ相関とヒュレーとのあいだの対比は、志向性の内部における非時間的なものと時間的なものの対比なのであるが、これは形相と質料の対比でもあるのである。

だが、志向性と時間性の関係については、意識を実的に構成するものこそが時間的なものであり、他方で志向的相関項としてのノエマは非時間的なものである、という異論がありえよう。これに対しては次のように答えるべきである。このような解釈は、志向的と実的の差異を非時間的と時間的の差異に還元することを意味する。非時間的と時間的の差異はむしろ先述のように形相と質料の差異に帰すべきものであり、したがってこの還元を認めることはできない。

さて、そこで上記の解釈が可能であるとする、志向性それ自体はいわゆる静態的な構造であるが、これがどのように時間性とかかわるのかを説明することができる。時間性は志向性における形相と質料の階層構造によって理解されるのであり、質料であるヒュレーは、いわば意識の背景的な契機として内的時間意識を伴いつつ与えられるのである。

なお、フッサールの内的時間意識の分析は詳細を極めており、本稿ではそのごく一部に触れるに過ぎない。時間意識全体は三層に分析可能であり、客観的時間としての超越的時間に対して、主観的時間としての内在的時間がありうるのはもちろんであるが、さらに先述のように、原印象が過去把持、未来予持をともなっているということが、さらに基礎的なレベルの意識である内的時間意識における意識の基本構造となっている^{ix}。内的時間意識の構造は志向性が成立するための前提であるが、志向性それ自体を論じる場合にはその中に立ち入る必要はない。このことは本稿の方法論上の注意でもあるが、志向性と時間意識のこのような階層的な関係はのちに大きな意味をもってくるはずである。

3. 見かけの現在

3. 1. フッサールとジェイムズ

これまでのところで志向性の基層をなすヒュレーに時間性を帰する可能性が示された。考察は志向性と内的時間意識の関係についてのごく簡単なものであったが、フッサール現象学 of 思想史的背景を踏まえると、この結論には大きな意味があるように感じられる。思想史的文脈を頼りに、現象学 of 理論的含意の一端について考えてみよう。

事実として、フッサールにはジェイムズの影響がある。だが、その事実の指摘にとどまらず、その内容における一致、および一致に基づく両者の思想の一般化の可能性を考えると、志向性と時間意識の関係が重要な手掛かりとなってくる。

フッサールの意識の基層は流れとして表象される (Ideen I, §83)。志向性の構造それ自体はジェイムズとは無関係であるが、この意識の下部構造はジェイムズの「意識の流れ」の説に一致するのである^x。したがって、両者は時間意識のとらえ方に関して大枠において一致しているが、問題はこの一致をどこまで一般化できるかである。ジェイムズの意識の流れの説は、もうひとつの重要な主張、現在の意識は瞬間的ではなく時間的に延長する、という「見かけの現在」の説に結びついている^{xi}。これら両説はおそらくほとんど同値であろう。では、意識の流れを認める以上、フッサール現象学にもまたこの見かけの現在に対応するものがあるということになるが、どうであろうか。論者によってはこのことは自明とされ、フッサール現象学にも見かけの現在があるということが前提される。先述の時間意識に関する説明からは、たしかに幅のある現在がイメージできそうではある。しかし、この概念の重要性に鑑みると、この主張は決して自明というわけではなく、注意深い検討を要すると思われる。フッサール現象学における見かけの現在とは、では、端的に何なのであろうか。改めてこのように問いかけてみると、われわれはいつそう深く正確に事態を認識する必要があると感じられるのである。

3. 2. ジェイムズの見かけの現在

周知のように、ジェイムズは『心理学原理』において見かけの現在を導入した。ジェイムズは見かけの現在の長さを測定したり、脳との関係を論じたりしているが、それらについてはさておき、この概念の現象学的な記述とみなせる箇所を中心に要約すると、以下のようになる。

イ. 瞬間の非実在性から見かけの現在へ

現在の瞬間は感じられず、非哲学的な思考では理解すらできない (PP, 608)。また、それは理念的抽象である (PP, 608)。そのようなものについて、われわれは反省によってあるに違いないという結論に達するが、それ自体は直接経験の事実ではない (PP, 608f.)。そうではなく、経験されるのは見かけの現在である (PP, 609)。

ロ. 持続、流れの恒常性と持続そのものの直観

われわれは、感覚内容のない空間を直観しないように、持続のない時間を直観することはない (PP, 620)。また、感じることの継起は継起を感じることでない (PP, 628)。

時間意識の内容は恒常的な流れである (PP, 630)。それに対して、見かけの現在は、流れの通過によっては変化せずに、虹や滝のように、常にある (PP, 630)。時間の原型はこの見かけの現在であり、それは直接かつ不断に感じられる短い持続である (PP, 631)。

こうしたジェイムズの考えから、見かけの現在が含意する時間論とはいかなるものなのかを知ることができる。それはおおよそ次のようなものであろう。われわれは、時間意識においては常に流れがある、ということを根源的なものとして直観するが、すでにここには奇妙な感触がある。時間意識においては、流れという変化と常にあるという不変化が重なりあっている。変化と不変化という対照的な性質が同居しているという事態は、概念的に分析す

れば矛盾でしかない。この奇妙さは、変化の極限として定義できる瞬間においては消え失せるのかもしれないが、それはもはや直観の埒外であって、直観される奇妙な感觸の説明としては、不合理ではないにせよ、外挿的である。見かけの現在は、素早く注意を免れて意識の暗部へ潜り込もうとするこの奇妙さをとらえて明るみに出そうとする概念であり、時間意識の内的緊張を純化したものだと言えよう。

3. 4. フッサールの内的時間意識

では、ジェイムズのこの見かけの現在の概念とフッサール現象学の関係はいかなるものなのであろうか。実はここにはやや入り組んだ事情がある。Gallagher の解説を参照しつつ両者の関係を整理しておこう^{xii}。

見かけの現在はジェイムズが定式化した概念ではあるが、類似した概念にシュテルンの現在時の概念がある。『イデー I』においては立ち入らずに概説されていた内的時間意識について、その詳細を論じた『内的時間意識の現象学』では、フッサールは、直接には後者の概念を論じている。そして、シュテルンは一般的に見かけの現在に類する概念に潜むある困難を指摘している。この批判は、ジェイムズばかりでなく、ブレンターノの時間論にも及びうる。こうした背景のゆえに、フッサールにおける見かけの現在とは何かという問題は自明なものではないのである。

その困難を Gallagher にしたがって示そう。ジェイムズ概念には(1) 現在意識の瞬間性、および(2) 過去の現在における存続、という二つの仮定が含まれており、それゆえ不整合に陥るといふ。過去が現在においてもそのまま存続しているとする ((2) より)。このとき、過去と現在は今の瞬間において同時に意識されていることになるが ((1) より)、これは矛盾である。

この困難を乗り越えるためにはどうすればよいであろうか。解決の方法はいくつかありうるかもしれない。だが、現在と過去の形而上学的な差異を十分に認識することが何よりも肝要であるように思われる。すなわち(2)の否定であるが、これは、過去を存続させず、却ってこれを消滅させることであ

る。時間というものの本質をとらえるためには、ぜひともこの事実の認識が必要なのではないか。

フッサールもおそらくこの困難を認識しており、そのうえで彼が示した解決は志向性によるものであった。過去はすでに消滅していて、存続していない。にもかかわらず、過去把持という基本的な時間意識の作用を認めることにより、過去はその志向性によって直接とらえられるのである。この解決はまさに(2)の否定であろう。

(2)の否定は、同時に(1)の否定を含意しないが、しかしそれを許容するであろう。過去は存在しないのであるから、過去を直接とらえる現在の意識が瞬間である必要はないのである。それゆえ、現在のみならず過去へも及ぶ、幅のある現在としての見かけの現在の措定は、この場合、少なくとも可能である。

このように考えてくると、われわれは意識を二つの層に分析することになりそうである。ひとつには瞬間の継起としての時間にかかわる意識であり、もうひとつには見かけの現在が寄与する時間にかかわる意識である。瞬間の継起における過去は消滅しているが、見かけの時間における過去は消滅していない。つまり、時間のなかに二つの様相を認めることにより、消滅する過去を現在へと繋ぎ留めることができるのである。

かくして、ジェイムズの見かけの現在を含む時間意識の原理的な困難が明らかとなったが、フッサールによるその現象学的解決の方向性が示された。ここから導かれるのは次のことである。すなわち、フッサール現象学において提示された志向性という意識のモデルは、その基層に時間意識をもっているが、これはジェイムズの意識の流れに等しい。ジェイムズの意識の流れの中に基本的な構造を与えるのが見かけの現在であったから、フッサール現象学もまた何らかの形で見かけの現在に基づいていることになる。

しかし、現状ではフッサール現象学における見かけの現在の正体は依然として確定されていない。それを突き止めるためには、ここで一度周囲に目を転じるのがよいように思われる。ジェイムズの見かけの現在の概念の影響力

の大きさに注目するのである。周知のように、この概念はジェイムズに続く世代の現代形而上学者のあいだで広汎に受容され、重要な役割を果たした。現代形而上学の理論的土台のひとつとなった、とすら言えるかもしれない。その間の事情を知ることにより、われわれは見かけの現在について、さらに具体的なイメージを結ぶことができるようになる。そうしていれば外堀を埋めるようにしてフッサールの志向性と時間の関係という問題に迫ってみたい。

4. 二人の形而上学者

4. 1. 見かけの現在の射程

ジェイムズの見かけの現在の概念は英米哲学にひろく受容され、たとえば C・D・ブロートなどが掘り下げた議論を残している^{xiii}。しかし、見かけの現在の影響は分析哲学の範囲に限定されていない。やや先行する形而上学がさらに大きな影響を受けていることはほぼ一目瞭然と言える。とくに重要な思想としては、ホワイトヘッドとサンタヤーナの形而上学を挙げるべきであろう。彼らがともに見かけの現在の議論の影響下にあるということは Sprigge が指摘し、強調するところであるが^{xiv}、たしかにこの概念に注目することで、彼らが共有する形而上学的前提が浮かび上がってくるのであり、しかもそれはきわめて重要な一般形而上学の基盤でありうるのである。

ホワイトヘッドには（いわゆる改訂的形而上学者として）新奇な概念を乱発する傾向があり、それはときにその真意の把握の妨げとなる。他方で、サンタヤーナの概念の用法は保守的であり、形而上学の伝統との接点を保っているが、それはときに思考そのものの革新性を陰らせる。両者の体系を総合することによって、われわれは時間と知覚の形而上学体系の全貌を俯瞰できる視点に立つことができるのである。

4. 2. ホワイトヘッド

ホワイトヘッドの過程の形而上学を、その主著『過程と実在』における時間論と知覚論に焦点を当てて紹介し、そこでの見かけの現在の概念について

検討しよう。

時間論

まず、過程の形而上学における最も基本的な存在のカテゴリは、現実存在性 actual entity と永遠客体 eternal object である。現実存在性は時間の原子であり、生成消滅するのみで持続しない。他方で、永遠客体は非実在的な同一者であり、色、形のような感覚内容をも含む本質である。過程の形而上学の基礎は、このように、存在するものの時間的性格によって特徴づけられており、過程の形而上学全体がいわば時間論であると言える。生成消滅する実在と不変の本質のコントラストが強く、われわれが通常意識する実体（アリストテレスの意味での個物としての実体）に類するものは、実在による過去の感受 feeling によって構成されたものにすぎない。

知覚論

ホワイトヘッドの過程の形而上学における知覚論は、もちろん先の時間論を前提するのであるが、次のような独自の概念によって組み立てられている。

- イ 因果的効果 causal efficacy
- ロ 現在呈示的直接性 presentational immediacy
- ハ 象徴的指示 symbolic reference

イ、ロは、知覚がもつ二つの極限的な様相である。イの因果的効果は、身体などを介した過去の直接の知覚である（PR, 81）。この知覚様相においては、時間は瞬間の連続としての継起に過ぎない。これに対して、ロの現在呈示的直接性は延長の知覚である（PR, 61）。これは現実存在性に永遠客体が進入することによって生じるが、これによってすでに消滅した過去へのパースペクティブが得られる。

しかし、これらはいずれも通常の意味での知覚ではない。いわゆる知覚はこれらが混合されたものであり、これらの交互作用による。それがハの象徴的指示である (PR, 121)。この知覚が成立するためには、因果的效果と現在呈示的直接性とに共通の基盤が必要となる。それが現在化された場 presented locus である (PR, 168)。ここには現在あるものばかりでなく、過去にあったものも射影されていて、時間的に延長している。これが見かけの現在に相当する。

なお、口の現在呈示的直接性の知覚においてとらえられる延長の構造は一般化されたメレオロジーとして記述される。先にゲシュタルト心理学に影響されたギュルヴィッチのノエマ解釈を紹介したが、この立場からみたノエマはやはりメレオロジーの構造のなかでとらえられるのであった。したがって、ここにはホワイトヘッドとフッサールのそれぞれの哲学的な立場とは独立に、知覚論が展開されるための形式的基礎が示されているように思われる。

4. 3. サンタヤーナ

『哲学逍遙』(懷疑主義と動物的信)の所説に基づき、サンタヤーナの哲学を紹介しよう。同書において、サンタヤーナは懷疑を徹底させることにより、動物的信 animal faith が素朴に措定するあらゆる存在 existence を廃棄してゆく。自然な事実や出来事は存在であり、直観の所与ではない (SAF, Ch.7)。存在は直観の所与に対して超越的であり (SAF, Ch.7)、自然な出来事の流れである (SAF, Ch.8)。懷疑が極限まで達し、いかなるものも存在しないことが明らかとなったとき、そこには本質 essence が見出される。動物的信が措定しているあらゆる所与は存在しないが、しかし、そのあるがままの姿は本質として直観される。この本質直観は、懷疑の極限において、幻想に屈することなく、それを公然とひとつの幻想として受け容れる、あるいはその幻想を抱く (SAF, Ch.9)、という自覚的な態度である。判断停止によって与えられた映像から外的な意味を剥奪し、色は色、音楽は音楽、顔は顔と

考えるなら、認識の確実性もたらされるのである (SAF, Ch.9)。存在を信じるならば実体を信じないわけにはゆかないが、存在を信じないので、実体を信じないことができる (SAF, Ch.19)。つまり、存在の否定は実体の否定へと通じるのである^{xv}。

4. 4. みかけの現在の形而上学

以上のようなホワイトヘッドとサンタヤーナの形而上学は相補的であり、以下のようにして両者の説を綜合することが可能である。因果的效果を論じるにあたり、ホワイトヘッドはサンタヤーナを参照し、その動物的信の概念について、修正の提案つきではあるが同意している。動物的信は現実の直接的な知覚であるが、サンタヤーナはこれを狭くとりすぎることにより、デカルト、ロック、ヒュームらと一致してしまっている (PR, 52f, 81)。感覚論的な解釈の可能性を完全に排除するならば、これは因果的效果と合致する。

他方で、サンタヤーナの本質はホワイトヘッドの永遠客体とありかたが非常によく似ている^{xvi}。厳密な意味での自己同一性は、超時間的なものである本質だけがもっている (SAF, Ch.12)。したがって、サンタヤーナにおける本質直観はホワイトヘッドの現在呈示的直接性に相当する。これは、ホワイトヘッドが質を対象とみなし、プラトンのような超時間的存在者として表象してきたことと完全に一致する。

上述のところから明らかのように、ホワイトヘッドの存在論は明確に反実体論であるが、サンタヤーナもまた実体を認めない。サンタヤーナのもうひとつの著書『存在の領界』『物質の領界』では、見かけの現在が絵画的空間と感傷的時間として措定され、存在の流れと対比される^{xvii}。存在の流れにおいて自然な瞬間が区分できるが、これは、ホワイトヘッドの現実存在性に似た時間の原子である。

こうしたところから、両者の形而上学には重なり合う点が多く、さらに、一方によって他方を補うような解釈が可能であることがわかる。注目すべきは、両者の類似性の要となっているのが時間概念の類似性であり、それゆえ

共通項としての見かけの現在は、彼らの形而上学にとって本質的な意義をもっているということである。見かけの現在に相当する現在化された場、存在とは対照的な本質が与えられる境位は、瞬間ではなく幅をもっており、意識が投影している（サンタヤーナは瞬間の独我論を支持せず、また、懐疑の後に自我を回復する）。そして、過去は流れ去ってしまっているのだが、しかし意識における投影として存在し、現在に影響を及ぼし続けているのである。このような思想を、見かけの現在に基づく一般形而上学の一形態とみなしてもよいであろう。

5. フッサールと見かけの現在

これまでの議論を要約してみよう。まず、フッサール現象学はジェイムズの見かけの現在を含む時間論を土台としている。また、ホワイトヘッドとサンタヤーナは明示的に見かけの現在の概念に依拠しており、それぞれに特徴のある時間論を展開した。

したがって、これまでの考察が正しいのであれば、フッサールの思想は明らかにホワイトヘッドやサンタヤーナの思想と対応づけることができるはずである。より具体的には、見かけの現在の概念が何らかの形で彼らの間で共有されており、とくに時間の本性に関する見解において彼らは一致しているはずなのである。もちろん、彼らの思想は個性に富んでおり、安易な同一視は許されない。しかし、基本的な形而上学的前提という点に話を限るならば、彼らの思想が根本的に異質で相容れないものだという主張にはむしろ無理が感じられるのではないか。

さて、彼らが共有する基本的な形而上学的前提とは、見かけの現在をとり入れた形而上学のことであるが、それは、ホワイトヘッドにおいては過程の形而上学における知覚論であり、サンタヤーナにおいては本質直観の説であった。では、フッサール現象学においてこれらの説に相当するものは何であろうか。言いかえると、現象学における見かけの現在はいったいどこに位置づけられるのであろうか。この問いは先に立てられたものの、これまで明

確な答えを与えられずにいた。いまようやく答えられるところにたどりついたように思われる。

見かけの現在が含意する時間の形而上学とはいかなるものであったのか、もう一度想起しておこう。見かけの現在を設定することにより、現在は瞬間的ではなく延長していると表象することができ、それゆえ過去をとらえていることになる。他方で、過去は意識の流れにおいて速やかに過ぎ去っており、そこでは時間は連続的の継起、あるいは瞬間の連続という姿をとるのであった。つまり、ここには非時間的な時間的展望と、時間的な流動とのコントラストが生じている。そして、この対比は、ホワイトヘッドにおいては現在化された場を形成する現在呈示的直接性と、過去からの直接の作用がある因果的効果の対比として現れていた。また、サンタヤーナにおいては、本質の直観と動物的信の対比として現れていたのであった。

これまでの議論からわかるように、いま問われているのは、これと同型の対比をフッサール現象学のどこに見出すことができるか、ということに他ならない。それはもちろん、志向性の構造のなかにしかないであろう。先の議論を振り返ってみると、志向性の相関的構造は静態的であり、非時間的なものであったが、それを支えるヒュレーの部分は時間的であった。見かけの現在としてわれわれの目に映じるのは、本当は消滅した過去と現にある現在とを共に戴く理念的平面である。そこでの見かけの現在は、現在ではあるものの、過去や未来と対比されることのない、より正確には無時間的な現在である。しかし、そのような現在の基層にある時間は、現在の瞬間からなる流れを形成している。だが、これこそがまさに本来の時間の姿ではないか。それは、その正体を眺めようとしても有為転変があるばかりの、無常の流れであり、ここにはもはや過去はない。

以上より、三人の説のあいだには次のような対応がみられる。

表3 三者の比較

	ホワイトヘッド	サンタヤーナ	フッサール
非時間的	現在呈示的直接性	本質直観	ノエシス・ノエマ相関
時間的	因果的効果	動物的信	ヒュレー

そうであるとすれば、フッサールが構想した、流動としての時間とは区別された、意味としての理念的な現在を含む時間は、したがって、ヒュレーと対比されるべきノエシス・ノエマ相関のうちにある、ということになるであろう。フッサールによって示された知覚ノエマの分析は、ヒュレーにおける時間と対比されるとき、まさに見かけの現在としての役割を果たしているのではないか。

たしかに『イデーニ I』におけるノエマ論は時間論の文脈から切り離されている。しかし、典型的なノエマは知覚におけるノエマである。そして知覚は同時に典型的な現在の意識でもあり、それゆえノエマもまた現在という時間の中にある、ということにはならないであろうか。ホワイトヘッドの言う「現在化された場」とはそうしたものであり、また、サンタヤーナが究極的懐疑の果てにたどりついた、本質直観の境地もまたそうしたものではなかったであろうか。

これまでのところからわれわれが導こうとする結論は次である。志向性は見かけの現在を生み出す機構であり、ノエマこそが見かけの現在に他ならない。これに対して、ヒュレーは定義上無規定であるが、それは少なくとも、真の時間である流れの一面でなければならない。ノエマはそのようなヒュレーに対する解釈である。

6. 表現としてのノエマ

最後に、ノエマを見かけの現在とみた場合、どのような形而上学的帰結が導かれるのかをさらに考えておきたい。

ホワイトヘッドにおいては、現在化された場において呈示されているのは

永遠客体である。サンタヤーナにおいては、直観されているのは本質である。では、フッサールのノエマとは何であろうか。

従来のノエマ解釈においては、ノエマは意味であって、これはフッサール自身が強く主張することでもあった。ここで、見かけの現在が成立することを根拠に志向性と時間意識を対比させ、志向的相関にともなって展開される場面を形而上学的な現在という実在の一断面とするならば、このときノエマは、ホワイトヘッドやサンタヤーナが指定するような本質であることになるであろう^{xviii}。

この「ノエマすなわち本質」という主張が認められるならば、さらに形而上学における本質の性格から、ノエマについてももうひとつの特徴づけを与えることができる。

ホワイトヘッドの主張を振り返ってみよう。本質は現在呈示的直接性において与えられるが、それが世界をいかに構成しているのかは、もうひとつの知覚様態である因果的効果の領域において明らかとなる。前者は明瞭で、後者は曖昧である。だが、動物的身体は十分に意識の内容を相関させるのであり、これによって象徴的指示が可能となっている (PR, 169f.)。

この主張は、知覚は身体によって可能となっており、それゆえ知覚の世界は身体によって意味づけられている、ということとして理解できるであろう。これはサンタヤーナが出発点としての素朴な意識を動物的な意識とみなすことと整合的である。

すると、われわれの知覚は全く無前提に成立するのではなく、身体のような前提に制約されていることになる。すなわち、われわれが知覚するときには、本質がただ与えられているばかりではなく、われわれがそれを選び取るということがおこるのである。これは主体による世界へのはたらきかけであり、一種の表現であると言えよう。ノエマにもまたそうした表現の側面があり、それを強調すると、本質は解釈による意味の様相を呈してくるのではないか。先に、ノエマは流れに対する解釈としての見かけの現在であるという結論を導いたが、このことを、ノエマは表現であると述べ直してもよいので

はないか。

これまで述べてきた解釈は、従来の心理学的解釈、意味論的解釈と異なる新たな解釈であり、援用された諸概念、諸学説の内容からみて、形而上学的解釈と特徴づけるのが適切であろう。この解釈の新しさは、先行するギュルヴィッチやフェレスダールらの解釈と比べて気づかれにくいものかもしれない。ノエマが主観的な表現であるという解釈を提示するためには、それが本質であること、本質であるためには、見かけの現在による意識の階層化が必要であったということ、さらにそのためには、時間とはなにかということ、とりわけ過去が必然的に消滅していなければならないということが論証される必要があった。ノエマを本質としての表現とみるためには、現象学を形而上学と比較し、また、現象学それ自体のなかの形而上学的要素を抽出する必要があったのである。しかし論証の手続きの複雑さは、解釈の価値を減じるものではないであろう。

7. おわりに

これまで、本稿ではノエマ概念のもうひとつの解釈を試みてきたが、それは同時に、時間と知覚の形而上学のさらなる展開の可能性を探ることでもあった。しかしこれは浅学非才の身には重すぎる課題であり、十分な結果を得られたのかどうか、心許ないものがある。ではあるが、すでに紙幅は尽きており、ここで議論を総括しておかなければならない。

考察の方針として存在論と時間論を結びつけたが、これにより、現象学的考察の本来の特徴を浮かび上がらせることができた。さらに、この特徴は同時代の形而上学の特徴でもあるので、言語論的転回以前の形而上学の成果をさらに発展させることもできた。私見では、当時の哲学の主題のなかには到底解決済みとは言えないものが含まれており、それらを引き続き考察してゆくことはいまなお重要な課題であるように思われる。

ホワイトヘッドの形而上学は体系的で、いわば上空飛翔的であるが、サンターナの形而上学には、段階を踏んで懐疑を遂行してゆくあたりに現象学

的還元の趣がある。ホワイトヘッドとフッサールを直に比較しても議論を深めるのは難しいが、やや現象学的なサンタヤーナ思想を媒介にすれば類似点が明確になり、それぞれの形而上学的含意もますます深く感じられるようになることが今回わかった。サンタヤーナ思想の意義を明らかにしたという点は本稿における考察の最大の収穫のひとつである。

本稿の考察は敢えて現象学を形而上学と比較したものであるが、この方針それ自体に対する異議を申し立てることは可能かもしれない。ノエマを表現とみるという結論を導いたのであるが、周知のように、表現の概念はフッサール『論理学研究』第一研究の主題なのであった。したがってフッサールの思想に内在的な研究は可能であり、敢えて形而上学に材料を求めなくとも、ノエマと表現の関係をフッサール現象学のなかで完結したかたちでとらえることができたかもしれない。しかしながら、同研究はその後のフッサールの思想の歩みにとって不可欠な一段階ではあるものの、ノエマ概念との関係を検討するには相当の議論が必要となろう。内在的研究の可能性の検討は重要ではあるが、いまは将来の課題としておきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K00095 (「メレオロジーの成立と展開に関する思想史的研究：フッサールとホワイトヘッド」) の助成を受けたものである。

[注]

- ⁱ Solomon (1977), Gallagher (1998: 132f.)
- ⁱⁱ Gurwitsch (1964: Part 4, Ch.2; 1966: Ch.7)
- ⁱⁱⁱ Føllesdal (1969 (1982)), Dreyfus (1982)
- ^{iv} Dreyfus (1982: pp.108-119)
- ^v Cf. Solomon (1977)
- ^{vi} Cf. Boer (1978: Part 3, Ch.2)
- ^{vii} Zahavi (2020: Ch.5)
- ^{viii} Gallagher (1998: 42-8)
- ^{ix} Sokolowski (2000: Ch.9)

- x Cf. Gallagher (1998: Ch.2, 3)
 xi Cf. Sprigge (1993)
 xii Gallagher (1998: Ch.2, 3)
 xiii Gallagher (1998: Ch.2), Dainton (2003)
 xiv Sprigge (2011: Ch.8)
 xv Cf. Sprigge (1974: Ch.7)
 xvi Sprigge (1974: Ch.4)
 xvii Santayana (1942: 236ff.)
 xviii Solomon (1977) は結論においてノエマと本質の関連を示唆している。

文 献

- Boer, Th. de, 1978, *The Development of Husserl's Thought*, Den Haag: Martinus Nijhoff
- Dainton, B., 2003, *The Stream of Consciousness*, London: Routledge
- Dreyfus, H., L., & H. Hall (eds.), 1982, *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge (MA): MIT Press
- Dreyfus, H., 1982, 'Husserl's Perceptual Noema', in Dreyfus et al. (1982), 97-123
- Elliston, F., & P. McCormick (ed.), 1977, *Husserl: Expositions and Appraisals*, Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press
- Føllesdal, D., 1969 (1982), 'Husserl's Notion of Noema' in Dreyfus et al. (1982), 73-80
- Gallagher, S., 1998, *The Inordinance of Time*, Evanston: Northwestern U. P.
- Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Pittsburgh: Duquesne U. P.
- , 1966, *Studies in Phenomenology and Psychology*, Evanston : Northwestern U. P.
- Husserl, E., 1913, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, *Husserliana Bd. III*, Den Haag: Martinus Nijhoff (池上訳『純粹現象學及現象學的哲學考案』上・下 岩波) (略号 Ideen I)
- , 1966, *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, *Husserliana Bd. X*, Den Haag: Martinus Nijhoff (立松訳『内的時間意識の現象学』みすず書房)
- James, W., 1918 (1890), *The Principles of Psychology*, New York: Dover (略号 PP)
- Santayana, G., 1942, *Realms of Being, One- Volume Edition with a New Introduction by the Author*, New York: Charles Scribner's Sons

- , 1955 (1923), *Skepticism and Animal Faith*, New York: Dover (磯野訳『哲学逍遙』勁草書房) (略号 SAF)
- Sokolowski, R., 2000, *Introduction to Phenomenology*, Cambridge: Cambridge U. P.
- Solomon, R., 1977, 'Husserl's Concept of Noema' in Elliston & McCormick (1977), 168-181
- Sprigge, T. S. L., 1974, *Santayana*, London: Routledge
- , 1993, *James and Bradley: American Truth and British Reality*, Chicago: Open Court
- , 2011, *The Importance of Subjectivity*, Oxford: Oxford U. P.
- Whitehead, A. N., 1978 (1929), *Process and Reality*, Corrected Edition, New York: The Free Press (平林訳『過程と実在』1・2 みすず書房) (略号 PR)
- Zahavi, D., 2020, *Self-awareness and Alterity: A Phenomenological Investigation, A New Edition*, Evanston: Northwestern U. P.

Noema as Expression

SAITO Nobuto

ABSTRACT

Although noema is one of the most important concepts in Husserlian phenomenology, it is nevertheless an extremely difficult concept, and it can be said that there is still no established interpretation of what noema actually is. There are two main interpretations of noema: psychological and semantic, and these are now in conflict.

However, what we should remember here is that the fundamental problem in Husserl's phenomenology was the philosophy of time. The above two theories are attempts to understand the noema in the context of philosophy of perception, and neither is directly related to this issue. If we break this constraint and focus on the problem of time consciousness as Husserl's most fundamental problem, the possibility of a new interpretation of noema will open. Noema is a concept from the analysis of perception and what is at stake is the perceived object, therefore the theory of noema is certainly an ontology. However, for any ontology presupposes philosophy of time, focusing on the connection between noema and time will make possible to put into perspective a time conscious metaphysics. In fact, this tendency is widely seen among Husserl's contemporary metaphysicians, and therefore it seems that theory of noema, which is also a philosophy of time, can contribute to clarifying the metaphysical implications of phenomenology. This paper attempts to approach the concept of noema from an angle that has not received attention so far.

The discussion proceeds as follows. First, I will give an overview of the main interpretations of the concept of noema (1). Next, I will reexam the structure of intentionality in Husserlian phenomenology (2). Next, I will discuss James's specious present and its relationship to Husserlian phenomenology (3). Next, I will introduce the metaphysics of Whitehead and Santayana, which are considerably influenced by James (4), and then, based on their philosophical contact, I will consider the possibility of reinterpretation of noema in Husserlian phenomenology (5). Finally, we will consider a new characterization of noema (6).